



海 2400 44

其の 2400 44 2400 44

州 鞋 仕 考 序

学 鞋 履 考 序 一

雪 中 考 序 履 考 序

中 考 序 履 考 序

側 考 序 履 考 序



一 前定庵とかしんよるせらる師の所也  
 其こふりり森乃町に在りて  
 今需堂者自せり別社中の表と合す

双上

江戸富別 百韻下果穂連  
 二十余人出在

象屠も控とを海	柳陰	葵方
比を法のみ此誘ふ語筆		吐月
君の代名明和二年とあけらぬ		周竹
善法を果にまよかり		真汝
眼をふりて白て物まぬ		胤暖
袴樹乃此まをたなり		桂山
日くけ事牽りて物も時いり		信又
ちききく上松の為音		飛祭

遊仙柳

花のつ小あまのちうらけ柳うけ  
志うしとせし物立とあうはて

け風送しけとてさうらう

いふあうさのみ葉もさう

許賀連中

一とくひ陽あらし清あり船  
柳舟乾く汗の濡衣  
三結小糸乃試繫夕く道と  
連うさうあふるとあうさうあり  
是袋天宮大工の伊達如二所  
りよ戸あない借屋行合  
月あう強うあゆまの祝もあう  
帆と燈うさうあゆまう

葵古

一兮

周竹

洲江

孤帆

老

号

竹

白川園

記さばいふるまじき事なりと  
あはれなる御くちの川のみ

みやこにやまのまはりに  
とくしむ教へく白川名園

浅香連中

行神ちあらはれ御まのつるまはるも

日まのつるまはるの神祇

あかくちてあはれ御の神なる

御まの御まはる公事なる御

たもまのつるまはる御まはる

女房さうの御まはる御まはる

中庭も御まはる御まはる御まはる

遊りあはれむく御まはる御まはる

葵老

嘉秀

周行

園山

主政

梅仙

秀編

伯老

安積香山

東勝寺に居る東の山と涼一  
糸女好香といふもこの席のそと  
なり強くと水師林の雲の物  
此あけふ新茶の娘一はさりやま  
於實方好著とて一緒見と  
子葉のうらやまはとてしり  
多〜〜〜

里人ちこもいふも花うは  
若白小乾く集好又月雨 青竜  
美酒とて今裡好馳名く 周竹  
こまにういふ心選別 若島  
此は好れく年ハ若の能度経 為基  
中りく書好の書あり志の類 雁足  
日弓忠畏小結よしとては心 秋丈  
夜を乃中らるる時より 百年

町家のついで

法奥の向うから来るおまは

男あつたつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつと

つとつと

二軒松三様連中

素子ささの歯音おそろしーお下園 聲を

練りあつた海刺巻 百合 一聲

免明ふとつとつとつとつとつと 園竹

拍掌なつとつとつとつとつとつと 春丁

石ささつとつとつとつとつとつと 市井

二軒松三様連中 春丁

御時意同くおとつとつとつと 声

老乃伝巻とつとつとつと 行



文字の掬

香深楮白唐の紙はよこし掬  
あより松葉とこころあけけり  
此石紙よきとて我あはれとす  
月流なきと拾ふとて平色と解

信史鵬樓遊中

又そ乃らやしの帳よふ志あまの	菓りうららるる菓の	改えと何しとて改もてけり	一口あらしとめねはなり	うらあななうらうらてあな	甚神うらうてあな	あさふて去角堂の朝の目	福うた鳥の秋のけり
菓を	香深	因竹	茶雅	指月	猪白	東吳	曉水



道祖神法樂

及らりし里らよりのまぢくはまのま  
あしひらやうのまぢのまはま  
あま乃神使いとまこりまは  
まのまぢのまはまのまはま  
一様とあまはの神はま  
初まのまはまのま

仙居止鳥居連中

け神乃はまのまぢのまはま  
あまのまはまのまはま  
まのまはまのまはま  
小判とまのまはまのまはま  
干てまのまはまのまはま  
あまのまはまのまはま  
あまのまはまのまはま  
あまのまはまのまはま  
あまのまはまのまはま

実る古墳

空を渡る鳥の  
古墳と鳥のけしき  
船延下海へん  
と祈るれり  
えとなつて  
なうて  
しひほくきふん

仙府加定彦通中

雀もぬく袖ありよ  
鳴呼と紐とく梅  
折る丸電お軍  
比丘尼の方  
阿の波ふ志  
さくく  
園るふ  
くめこそ  
竹  
菓を  
焚高  
園竹  
穿石  
香  
太  
石  
竹

武隈松

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

松府郡定高連中

あ老も松の種もらん下ま~~~~ 暮を  
涼さして月お夕はゆ 方水  
鞆忠宣お付お遊〜小 舟竹  
書・~~~~~まで隠けて何る 太阿  
ふ散らうららもあぬあふお初と可 水  
おとをたしもは〜やけくれ 太  
人ふきう〜て柳芝の咲子も 阿  
魂まます夜お燈なる〜歌 竹

不志し

みらぬくのあふまゝにさあふ  
人よまゝにさあふまゝに  
こゝろのまゝにさあふまゝに  
入てぬく得毒う様よく一取麻

お見り

村田大屋宛通中

かほり高わきまの山崎	蕨を
里をさきまひ紅乃まじり	得毒
傍草の中へせうく意をこ	園竹
あつらひあふた物りハ	高嵐
潮若大志のらんこ細う派く	高頂
賽ハ帆と揚てり	尺意
有明如影らくさけく教柳	茶音子
こゝろまゝさあふまゝに	茶麻

名取川

陸奥よりつらふらふの川

なまなまきこころの川

只多利の捨る川

あつちの川

くまの川

仁府是取在連中

涼しき川

あつちの川

世の中へ近敷き川

こころの川

高田小生

それと

あつちの川

まじり

角序

苦水

雨夕

李角

嵐

園行

苦角

煎

愛宕御詠

萬葉集卷十八天平勝宝元年

五月十一日加具陸奥國出金

須賣呂伎能御代佐可延年等阿頭麻  
奈流美知能久夜麻爾金華佐久

とよみんらいろくふ信く今や他府は  
深長井十るおれをしとせ似一目控日お  
ぬしあゝまゝけもそけいよあゝひし時

他府品定高連平

波く口お萬葉とくく令華心 蕪々々

青田とよみん白帆何艘 檜目

水まふふいと曾長利の通辯と 同竹

りよの編ちとてなろまろり 夏雲

組町おそむくくお着ふおれ 日

心むくふくへお衣のあらし 衣

毛纏のタラしな井ふ夕日火 雲

栴口田くふに草くくく 竹



中

みきぬくひこさしとせ  
文城野乃まのりや路ハ  
ぬふまのり

仙府嘉定彦連中

水之月のあふまるとるも路ハ 葵々  
杖もにんくふまるとる路りせ 琴系  
側くあふまるとるのまると 目竹  
喉乃奏整ふ路りぬらり 女 白之  
鏡くふ姑蘇城外たを心寺 琴  
有明うますふふ領域 三  
秋をよまうこの情を胸あはる 白  
路りけらく草乃初め 竹

官城野

治まら代の中庭ハ新代ありて  
曲者ち時まらちよふ家ほりて  
名所もはらうま思ひのこも  
あら代りしひのこ

國字より後あふねと拙き  
又之思ふ文城野とむ  
青かりあふるるもふく  
らりて

紀府冬至居連平

まきくふ葉もじうの綿衣 薔を右  
日忠むしむ野ち探題 東羅  
こしおらふの指乃神思と 周竹  
こまの影ち痛てこま 兔耳  
一歩はめらら祥うたしうら 拾紅  
大坂格子ありまやい貴客 春耕  
猪身で待つくこそふと 夫芝  
ままのくまぬえや 拾紅

十符草

みらぬくの十符忠者まこと  
七ふらは君代之保まはりて  
之ゆふおゆん

伝府志定成事

祖父染くの後まも中一葉は 葉を  
むくしなうくお行里は日 孤峯  
軍記ふまといもまの能於るて 周竹  
まはくくろくろく入てははく 之峯  
水たる心氣はくはとるあはは 孤  
日とり車とまはりて 左  
るうとてと福らくは信都 之  
干葉子よも葉は信都の中 竹

壺碑

風土記曰坪碑ハ鶴の地ナリ  
昔鎮守府の門碑ナリ惠美朝  
舊是と傳造一法書キ見雲真人  
リ一々今崇千葉のガニ  
海きりといふん

仙府志之序述中

その君は石工入るやふていび	藝老
城ありて見るもの末枯	歩明
弟殿なるあつ海と月共ら流て	周竹
孫乃以ち一先日わ	麦車
姫君小流てやりとひ芽は鶴	明
亭子中一ゆきむ木芽ハ脱	そ
門をた穴ありやあふさるう	車
あや一ハ伊美と海は数と	竹

東松山

巽手船くさくに神志志ありほく  
しん志のきや戸波いさしこい  
まゆしは波きうたまうさいあひ  
あふりいさあふりいさしこい

仙府赤良道通中

秋風和今もるを波のき 葉を  
きびちうふ月志古き 習  
逢人、夜きうさうものらして 目竹  
思葉の卯ね弊く志まふ 近水  
鳴系も盧ふねて冥ふたぬあり 斎  
あふりいさあふりいさしこい 水  
いあひいさあふりいさしこい 竹

野田玉川

夕下れを汐風うけてみちおくの  
野田の玉川ちちを鳴きなり

今八川あそび田よなり

そのこころり細ふたろうまは  
海もさるふり

塩竈連中

遊きそくきく見えぬ川の子香 暮を

一幅ま乃袖くあさくさ 杖又

うなひきり挽久きや甘月晴く 目竹

吹き所を何買ふとも 奥行

遠るも取ふえなれば蛇くま 夫

船橋を何る借代お波 在

梅子目の表くりきるあはれハ 行

又す乃表ふりある白香

松竹

花紅葉ありけ浦乃妹のくまもと子賀れ  
浦小庵をききけ海秀英り船をわひ  
して今宵ハ旅店の標を記しきまを  
奉る七月すの夜は月又大堂のむら  
より吐て海上水を渡るこゝろ一室も  
實念とくく一人の静けうはな  
むをさうれけあいのちけなの

新音やちとより恋のふね鳴

葵を

日なり海うらむ波のきぬ

英行

かろくと新酒のこゝろあつらふ

周行

入十年新れあまッ巻あり

海秀

ほ叫の李婦人のまゝくくら帯

行

風品也く顔乃格れ夕景

左

くくひあれ竹ふまをのあうまの

秀

夢解けよの醒破山科

行

平泉

前後の戎衣一々布巾の平泉のこころを  
見らば大踏下車のゆりも仰ありたため  
あゝとむむひ相ちまゝていひてまゝ  
暖のこゝにあはれまゝるんと教あり  
こころふいけらゆりこゝまゝなまのこゝ  
令結まゝこゝりまゝやゝある中房に  
うゝまゝ系にた柳のゆりもみゝるゝ

後原にもある御殿のゆりもた神とまゝるゝ  
かゝれたるのゆりもたゝたのまゝも  
ゆりもたゝたのゆりもたゝたのまゝ  
こゝりまゝのゆりもたゝたのまゝ  
目のこゝりまゝのゆりもたゝたのまゝ  
まゝたゝたのゆりもたゝたのまゝ  
いゝまゝのゆりもたゝたのまゝ  
ゆりもたゝたのゆりもたゝたのまゝ  
ゆりもたゝたのゆりもたゝたのまゝ



神社仏閣の一日一日のやまなはんばくをよ  
柵を築き和歌の山をよと強流岸をよと山  
後ては館をよと河津射をよとまきるをよと  
元里の山をよと遠くをよとまきるをよと  
秀徳の山をよとまきるをよとまきるをよと  
風を列をよとまきるをよとまきるをよと  
柵をよとまきるをよとまきるをよと  
ふ秋をよとまきるをよとまきるをよと  
まきるをよとまきるをよと

山日連中

山ろひえ川なるとり林のほ 葉を  
まきるをよとまきるをよと 栗林  
出りりともまきるをよとまきるをよと 周竹  
寺をよとまきるをよとまきるをよと 争之  
怖く小蛇り軒をよとまきるをよと 林  
けをよとまきるをよとまきるをよと 左  
女房もまきるをよとまきるをよと 之  
那志もまきるをよとまきるをよと 竹

緒絶橋

みち乃くめたうを橋やまきあしん  
ふとぬやの月いこら西こら  
と海のは古河といふ名のもろま  
りりて今も詠人かたけあめ  
ころはこらこら

仙府初定庵連中

朝こぼ草の絶絶や橋ひし 根をあらけ行あきの月 木免ふ百物こりおとされく ぬ又夢まの集積まき 又月あのみやこふ傘の障り 二十二年志こらえん 稽あつこらもたてて 然るをいふ小茶飯らん	蕨太 線水 用竹 如文 白花 口友 陶家 水長
--	--

筑波遠を

ゆきと二羽揚上り目訓一山此  
らまにんそてぬる北地きく  
まのうら川春とくふるふとまきりく  
東泉禅杖ふちるく足正休む  
あつらん風浪のなもこりく福を

武蔵川夜連中

床のきやめをむねりすみるは川 暮を  
眠るまゝに志取中の月 蓬戸  
ゆき西風炉の余波と酔てまゝ 周竹  
政中とらとハ鳴呼くこらや 如麻  
若菜に道といふものなうりさへ 都門  
神の蹴踏も門乃綿木 来扇  
一尺乃信ふ成きるまき風 風絮  
風はあやこら風のとうらり 破号

赤岩

夏菊をゆくを女帰るのうらみ  
と約ていかにきく人け帰景亭  
ふらふ遊楽をかくる日あり

赤岩連中

菊を	菊の多やとあはれ九日と花入奥
帰景	笠下百里の久留る家あり
用竹	浮雲共二階と婦嫁かくまわて
曲枝	胸乃しらほくと卸てハなみ
波城	枝乃志狐としらふきくしと
又出	木の葉おろしと千叙破障ら
山史	双と乃負と奏盤ハハハあり
都川	八百着屋共せすまふ太く

冬

仁壽冬至後律

おもふるともふとこゝろもや  
 ねふとてとて東乃ちける  
 馬船ふ冷あさこし  
 月く已り角やらし  
 着船やもちをゆく  
 山狗や日乃あくる  
 葛のふらふら思ふつら

東郷  
 春耕  
 芦百  
 菊史  
 拾紅  
 右幸

付くまふまふとら  
 七夕や柳もま乃系は  
 さの眼とくうまもら  
 ねし海や只まふあ  
 石の戸もつらつら

菊好  
 拾紅  
 梨子  
 利天  
 文芝

止島産社中

蝶も目だはは  
 ちまふく  
 うはらふら

布朴  
 和文  
 素里

さしつゝの夕陽ひの目わい  
洗徳  
水際ち池の坊より柳くれ  
松起  
夕暮のほとりこらや野の橋  
北里  
川のそりけねこつとてあつた  
笑登也  
おぼろやあまほくらも暇せし  
知昂

是非庵社中

昔焼よからと命やこつとす  
苦角  
出たり神よりとらふ紙を  
苦泉  
を川流や跡の目ち仲の松  
李角

高福堂の想ひぬけとらふ秋の音  
角席  
うらひすれ迷ひもあらう東の町  
一歌  
みしり夜や春の二子に後好し  
嵐十  
あかしく小月を渡りり留まら山  
風沙  
鬼灯や始り懐る荒れかけ  
雨夕  
縮ふと人ともさるや浦の程  
嵐足  
青燈下社中  
あまの庵をたふして  
福むしあをせさる茶いふは  
御川

~~~~~水の傍の小敷〜  
湯屋敷の湯の音や〜  
~~~~~と寝るを母よ  
心入るものには〜  
中〜の遊接の塔や〜  
宗ぬの音〜  
山公の〜  
~~~~~の酒

呂音  
湖口  
三夕  
水  
林石  
端里  
圓有  
又風  
岸松

~~~~~茶の末乃中〜  
~~~~~  
~~~~~

千苓

嘉定居士中

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

習齋  
楚客  
太阿  
方水  
麦言  
麦車  
孤峯

岩沼

|               |    |    |
|---------------|----|----|
| 新あや白しとあひと師    | 妹  | 三峰 |
| 新虫もあやしい神喜や水鏡川 | 穿石 |    |
| 馬守くくもや神の織いりき  | 白花 |    |
| あはれ目こもよきこり女帝を | 日扇 |    |
| 海とこもこもよきはるる鳥風 | 定章 |    |
| 翠あきもも越出やあよの月  | 紫丈 |    |
| 山目や波あくりに流むら   | 如文 |    |
| 移まの端をたしこや丸木橋  | 急車 |    |

品定唐社中

|               |    |
|---------------|----|
| 約心より桐溜りけん紅ふ新  | 橙司 |
| 石も甘くあやあよの月    | 近水 |
| 藤入乃神もよさうあ綿    | 歩明 |
| あまや楮ちあまあまう    | 陶家 |
| 着候やふらは晒あ橋こめ   | 绿水 |
| 新緑の骨こなりたる枯脚   | 四友 |
| 春乃初あまやあつし若葉   | 水長 |
| 松小川あ秋立ちあ来てあのは | 丘車 |
| うらうらも七橋の縁とあま  | 奥行 |



影とくく松葉の隈や晴れ月  
 着るや味さう果るまじり  
 妻もゆき香い袖くくく梅  
 幽昔けや入道くくく暗のく  
 獨活の香や落ぬふゆの刻心  
 淋くくく極ふくく干大根  
 朝のくくあさくく榊小橋てある  
 名月や空ふくくく如くくく  
 並海くくく如くくく如くくく  
 海秀  
 暁扇  
 危波  
 日扇  
 山曉  
 危峯  
 李山  
 如  
 琴松  
 白之

入おん虫小指おる山急如林 琴系

山日社中

撰くまそくまのふお撰くま 業林  
 阿とくまおかおまま思回標小 竿之  
 極人如お著小床ておる扇ふ小 福秀  
 最入と注とくくくくくく 早皓  
 帯ふとくく細くくくく衣川 丸之  
 留るまも日敷のちりて牡丹小 曲朧  
 侘碎ふとくくくくくく 菊山

雪月の夜をみればくらくれ  
おしあひの目も今もて雲水  
とらふとも蝶をくはや花子の花

宮野社中

芙蓉や敷や人のうらふ雪ひと何  
ちほくは白塵ふ花て美は柳の  
雪くおめ咲やあそりの志を此の  
梅を乃常しきさしきうと雪  
むしはぬやあふともくろを花常

松嶽  
草嶮  
梅里

澄江  
玉筍  
藤辻  
西河  
琵琶

桜子やあといせを花を石地を  
志あくふ節こくさりの良なるを  
虫不しよすて思はぬや比直尼寺

村田大蔵宮社中

入日くたを細みちや藤好し急  
野ととも春まで廣く音は海  
之日月を梅ふしきく美花を  
行長らぬくたて海はあふん  
おほらくと初思はふこくふり

柳江  
摘菜  
楚江

得斎  
雪嵐  
善言  
高頂  
茶脈

昔年乃神子也 天章

桑新卷良年産社中

いさよひや早ふ貸する園あり 可貞

十二夜や一なふりこむ八百八島 四車

新語と音こりこあ川さぬ 秀色

りくさふ心乃うく柳くぬ 卜而

岸ふあふ一足あしは踊り 射牛

福の鵬樓社中

曲のや突も是の心御儀水 吞漢

顔そと三層よーくうり志く汁 指月

志らる新小園と語もや十二夜 猪白

新月子恥しと名や味肯山 曉水

月と心とさしにさく柳水 涼花

夕ふや陰るやと語く暗くの 菡雅

青空好きつる光ハ柳く照 東風

二市松立標社中

志乃あにうらぬまや山 松 一殿身

水も新空をかけらや汐干河 市井

東のまのやまの野のくま蝶何世 春丁

卯之文古語の語社中

尻去りよ啼や日く世のかんこま 青鳧

髪らくくや始もつこまお起る 秋史

田一枚をしくまぬして水鷄小 雁足

なからまつこま春をえんこま草枯 萬象

圓もりのおちり流るらりり 為春

社の日やお老えんこま新法師 長江

うらたの思人の住居や若お竹 素明

須磨ちいりにとらへ向て秋の常 百年

香ち茶も汲多く菊おりこく 櫻門

乃こりらくやや夜をまお種おえ 北山

花ふまこは是らりりまらり 泉之

とめくふおゆをたし日の隈 百川

皇角下風のどくりや秋のくれ 篤甫

金お如町と曲まはき思うら 竹毫

安積我意斎社中

十の束の一連来りりるを念佛 雲物秀

七種や秋ハさぬさぬ者有音  
 葉の花如一反そり 盛る如  
 幸崎のしるしねるさ思ふ如  
 夕の白や鳥さりし心花如中  
 七々やま川り如まましかさる路  
 さり秋やぬくさよる襟いさ  
 木のらーやささるさ思ふ如

嘉永  
 梅仙  
 圃山  
 泊老  
 耕牛  
 嘉貞  
 土坂満

茶のそぬや平筆院ハ為ぬ之  
 白石  
 麦螺

夕露よ種ぬるーり女七夕  
 南都  
 星宿

才ひと川小一回ふさく也古用テ  
 出取酒田  
 斗南  
 穉ハや梅も室く花乃疲  
 小飛  
 千和

壺碑もて  
 大石  
 寶窓  
 碑も角文字よりとかなしあり  
 上  
 山  
 投茶

釋々の飲おぬあり細代より  
 六川  
 同行使上封寺  
 秋田  
 松葉  
 初唐や是くさるぬるも

葉くまて風やりこす桂うね 象浮 湖南  
 葉乃らまゝに深てハきとる於蝶 志津 舞流  
 花の酔こゆ一こゆりおろる月 志と  
 冬くさねかた枝とける柳 飛馬 蕙雪  
 そとあふ芝あらう一花の陰 群石豆衣 一分

年越こたふ尺のぬ桂うね 上乃神田 詠舟  
 春くと笠乃あふる雪 雪子  
 水ぬらむとくくきき柳 太江

馬の子め舟ふたくらう 英菖  
 藤あうて笠ふこけ入中 志遠  
 晴てくく声乃藤うく蛙 馬高

又うらぬ一本雲秋や 帰景  
 雲凡の音も袖渡す 郡川  
 分列ハ控て去向や 曲枝  
 不てくすや 五出  
 何一ちひや水 山史

武蔵赤岩

初見は水なりりり水仙花

新巻

波城

これおとのおほら月夜や帰花

川夜

蓬戸

祿堂乃移りあふや鶴既花

如麻

松火を人の前して枯野の

都門

歌さぬを門又ききく石りれ

来扇

そのひと川於小馳くし多小

風絮

阿きくして水不白桐並落せり

破弓

本からしや今昔ハ迫り雲の松

山晴

仍秋の古郷へ山乃ありりり

松伏

三舟

松風乃去々を春より知あくま

午雲

ゆるまの舟に於くはる雲

巴人

遠坂樹川

目も一里もくはる時沙やうら

之園

籍并細を誦す秋もあひる月

其桂

ゆやすすき園路を思て雛子の声

雪花

破へ来く破又をくはて深

鳥道

山崎や新ハきのふ水志有  
 浪と出て雲井の神や杜若  
 あふれる陶壺や雛子のこゑ  
 飯音も云一物なれたら  
 阿まてらす下所の浮所や雛を  
 水音の聴つりてなく  
 一日乃風のよそやおろり月  
 妻面や膝一こゑの書巻の巻  
 阿部  
 吳笠  
 飯堂  
 やひこ  
 葵園  
 楚江  
 丸莖  
 日明

相見

去々云お秋よなりより山さき  
 蛤ふ波お花おり志ほいこ  
 いこ月ふらうくく人風中  
 扇榭花お重く秋や水うね  
 上計つる奈ちなきて柳舟  
 紅梅や神おこ海と望く  
 後ふとあつんくまろく柳舟  
 潮海寺  
 楚竹  
 南沼水  
 中身  
 崎石  
 東庭  
 菊明  
 柳南  
 巴北



松舟下まきともの河神遊 又羊

余岡

不とくきぬまきともの花より 柳司

子藤やまきのうらぬ金合せ 昌竹

五川小松おろくく 越久れ 百續

西いあさうらう思まふま存ふ能 若吏

洲とくさる老の思まやまの衣 鬼園

内田

河骨や水のちくくぬ笑にくに 素女

三院

早稲と園子後りり 梅おまふ 涙道

水落涙の跡もまらぬや 冬は梅 葵水

おる後東やのくくまきり 梅おま 桃葉

若草のやゆもおまぬる開りまき 冬雁

作乃まきハ葉ハ泪やまらりる 扈舟

まけくまきとものまきとまきと

道別二章

ましくお花ふあしん 政院うら 柳家

まきくまきとものまきとまきと 鶯渡

そよ又筑波如瀬や阿波如河  
ふゆふ日如きくや行生行  
花雲如散くもえ方の花雲  
晴ふくや歩く雲る水如隈

送列

さし一由如前途の晴や雲如  
そよふも約くもいり行く

千川

芋亮

湖天

喜川

園二

真可

祇吏

治府

耳海

葵丸

葵且

雅堂

馬老

都雁

葛力

兀子

大耳

行番ハ石針賣りとそよ去 矣  
下流ノ文おひくくや系こそ  
之末婦とこその言て病る春は  
のほり針指お之方橋うね  
東はくくも暗と黒色の新法師  
そよ風如志さるらん古さばくく  
志くそや一はくくいさくくけ  
餅するもめん甘さくくく  
御色ハ流るる水をばるらん

治府

三輪の浦並に福よみちのり神とて

松島乃有途とてなす妻菜汁 し呪

ふみまごうた祖の神とてまゝして老師の誓書と

き下け詠言乃り詠言のまゝまゝまゝ

白目の比し西上人の詠言とて一書とて

八ふしひ詠言とて詠言とてまゝまゝ

年なまゝとてこのまゝ詠言とて

七毫毫の塵とてまゝ詠言とて

乃為れよの夜も秋とて詠言とて 周竹

東武

志く詠言詠言とてより葱一把 天府子

梅の香やれとて詠言とて 婆心子

昔清水女むすひとなりとて 吏流

岩指とて詠言とて朝日式 楚水

面雲のまゝとて詠言とて 桃鏡

礼してハ風とて詠言とて柳うま 宣中

浜土乃とて詠言とて詠言とて 女 野菊

妻のまゝとて詠言とて詠言とて 仙衣

ふ後のま乃ちる色くむの茶店あり  
も茶あるしお祖天唐して東土の事とも  
いふへいされい川の比や不思後の冥加と  
世部くうりて命り茶うはれ名とけちりこそ  
人こけりまこるあかりてちりまへし

日ひけんふくせん茶の結ぶ 葵を

奥波程遅りやまね茶名とふあまて  
まふいあたりとと来ふて夜は茶物お  
しよやまうとにんまへ

まの仇や首受とさるて伏まら 突波  
ひら

弟と又も途のけま受まら  
まふりも神うらあまて

踏切くわしうらまをまへ 葵を

茶中を所のり柳エヤつうら

しんしんまやう杯と柳帆は為柳  
まふり間は神とてしとま  
新あや思おまよけと本り固  
まふりあやあまの柳は扇  
まの仇や奥の細及くまうら  
車式  
第巻  
新編  
百頁  
空杖

白牛  
東川  
素丸

出羽玉子經也して

象の笑ふ顔もあつた月 月竹

月竹を象の涙よとて

予ハ鄭端の家よとて

名目や波もあつた月 蕨を

|               |    |
|---------------|----|
| 吹よせそ散る花乃りあつた  | 蘭  |
| 泣くもあつた月       | 蘭室 |
| 夢をみるもあつた月     | 鳳宿 |
| 雛乃雀二子の肩にありひたり | 菜路 |
| 鬼味曾の涙名にありぬらん  | 是物 |
| 人稀くは菜路もあつた    | 西流 |
| 音折とあつた月       | 翠羽 |
| 山あつた月のあつた日    | 鹿亭 |
| 白川や開ありあつた     | 月竹 |

山蓮の花奥ゆりし志乃ふ摺

同作

仙府に一庵と結く

甲申日ハ

六月十六日こゝりま地や習子か阿母は  
困意よ 志乃のまじりしうらな

保葉ふ隠指も卑し 茹定庵

葉友

七夕

名指して星の一水お笑まん

東りゆききく卯の花を成さるり

まのそぬ寄くまふれ也おこえ

蕨や菘割くふと界のく

末光  
暁我  
桂山

瀟つ羽寄くまらや暮れぬ

山幸

夕くまはあふぬもあられ角力丸

祇什

吾他もまのまじりやすこ田螺水

女

祇三

松島やまきくちよれて秋の雲

同作

緒絶楳

綾子くゆ後工きてり花すまき

系組の紫系藤ハ給く暮ふりり

班象

七種や宵の拍子く女きまらる

富屋

山蓮の志乃くまらて花水

羽幸光

上風と沖もささやわらうふ名  
水も岸折をわらう水櫃子  
鳴戸も水が那ハりふ月

毛越寺院古

礎をかきくろまて秋のくれ

光堂

簪笠りる音殿まのりり  
日らりや魚越しふ光堂  
梅吟や根さきき音ハるなり

信史

雲介

辰柳

葵を

周竹

人た

暁のけらるるまふく  
夕ふり此野や城やりの花雲  
菘のちれ社家の嵐此道ハり  
木冠乃初もさききさきり  
あまのこも筆お用さう然日

実言古

塚よりぬ花さく門を木下園

文城野幼涼

光萩と美くう訓深ん夕涼

嵐暖

女 炎知

梅人

祇考

阿音

周竹

葵を太

只ひと山お井と遊く怪うね  
 梅の香を解くとまろや猫のこい  
 新飯や柳の影と遊まると  
 としとよまきとくる顔うま  
 とのいそぬまゆなをゆり田あえ  
 魚るゑやまゐい柏野の中ふ 咲  
 本場とあつた六工おまゝ水船の  
 暁の價はあらうとそれのま  
 牡丹はくまの侍や妓王妓女  
 六窓  
 連犬  
 弘峯  
 柘太  
 葵太  
 周竹  
 太喬  
 舊園  
 完車

名目や日乃十又日くれとより  
 毛髪と髪日となりう鶴尻花  
 名目や水とむくをほ忍月  
 六月や仲ふ帆りけてかまね  
 秋はす花ひとけあふとあり  
 花線  
 周竹  
 豊右  
 雪堂  
 吐月



